
The Truth Of Magic

TOUGA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The Truth Of Magic

【Nコード】

N0160P

【作者名】

TOUGA

【あらすじ】

魔法の世界で、毎日楽しい日々を送っていた光と誠と転校生の譲。ある日いきなり村がドラゴンに襲われ、壊滅状態に。助けてくれる人もおらず、手掛かりを探す。結果、過去の世界に行くことになった。そこでの冒険により、明かされていく真実。緊張感のある展開で、多分面白いです（笑）

魔法学校

学校が終わり、下校の時間となった。

「光、また明日！」

「じゃあねー彩」

友達次々とかばんを持ち、帰っていく。

正直、私はまだ家には帰りたくなかった。

なぜかというところと今日返ってきたテストの結果がまた2位だったからである。

「はあ・・・」 ひかりは重いため息をついた

ひかりは15歳。髪はとても長く、きれいな赤色だった。親はこの村一番の能力の持ち主である。

この村は割と小さな田舎の村だったため、学校は1つだけである。そのため、学力もバラバラ。

それを気にする生徒は少なく、明るく元気に過ごしていた。

なぜなら、この村の教訓は、「個性を大切に」というものだったからだ。

それぞれが、自分のいいところを存分に発揮し、のびのびと過ごしていた。

「今回も勝たせてもらったぜ！」とご機嫌な様子でひかりの横を通り抜けて行ったのは誠だ。まことと読む。

まことは俗に言う「天才」そう、明らかな才能をもっていた

「まこと、あんたはうるさいのよ。あんたの能力と違って私の能力は繊細な変化は難しいの！」

そんなまことに対してひかりの機嫌は最悪だった。

クラスメートが口をそろえて言う。

「あんたたちはいいいわねー。私たちなんか全然能力を扱えきれないのに。」

さっきも書いたが、この学校の生徒の学力はバラバラである。

今まで何度か「能力」というワードを使ってきたが、それは魔法のことである

そう、ここは魔法の世界。そしてひかりたちが通う学校とは、魔法学校のことであつた。

次の日の朝・・・ ひかりは見るからに寝不足だつた。

おそらく、昨日帰ってからさんざん練習したのだろう。授業中でも、うとうとしていた。

それでも先生は気にしない。なぜなら通常の授業で扱うような内容は半分寝ていても、難なくこなしてしまうからだ。

ひかりも普通の生徒から見ればあこがれの的である。だが、まことと比べると若干だが明らかに劣っている。ひかりにはそれが悔しくてたまらないようだった。

休み時間になつた。「ひかり大丈夫―？」あやが、心配して声をかける。

ひかりはやつと目が覚めてきたようである。「うん。ありがと」と返事をする

なんとなく、まことの方を見た。先月転校してきたばかりのクラスメートにコツを教えていた。どうやら、まだ魔法は使えないようである。

まことが明るく話しかけているのに、おどおどした、ぎこちない様子で話を聞いていた。

ひかりは転校生とは何回か話していた。いつもおどおどとしていたが普通に話せるようにはなってきた。ひかりには、魔法の才能はないうように見えた。名前は譲という。

ゆずるは性格とは裏腹に、大きな体格をもち、力は強かつた。本人は口にしなかったが、ゆずるにはある能力があるようだった。

魔法かどうかはわからなかったが、特別な能力のようである。

私は、午後もうつもように授業を受け、そして家に帰つた。

平和な毎日がずっと続くなんてことはあたりまえで、ひかりを含め

た誰もがそんなことは
考えもしていなかった。

信じられない事件がおこるまでは・・・。

すべての始まり

「起きなさい、ひかりー」

いつもと変わらない朝だった。

支度を済ませて、学校へ向かう。見上げると、気持ちのいい、真つ青な空が広がっている。

ひかりは、少し冷たい空気を思い切り吸い込み、深呼吸をした。

学校につくとあやが「おはよう」と言って迎えてくれた。

ふたりは親友である。家が反対方向だったため、登下校は一緒でないが、学校ではいつも一緒だった。いつものように、昨日見たテレビの内容や、宿題のことなどを話しあっていた。

ひかりは、こんな毎日を割と気にいっていた。

そんなとき・・・

事件は突然、前触れもなくおこった。

瞬間的ながらも眩しいフラッシュで、目がくらんだその時、突然激しい揺れに襲われ、

校舎が崩れだした。学校の生徒は一斉に校舎の外に出て、散りながら、逃げた。

それぞれが、互いの無事を祈って。

ひかりは、逃げながら、信じられないような光景を目にしていた。村の建物が壊れ、崩され、何もかもがめちゃくちゃになっている。

そしてその先のものは、はじめてみたが、誰でも一目でどういふものなのかを悟った。

「はあ、はあっ ド、ドラゴン・・・？」

ひかりは一瞬にしてすべてを壊してしまったドラゴンにかつてない恐怖を抱きながら、必死に逃げた。そして、村の片隅にある、普段は誰も近づかない「ほこら」にたどり着いた。

ほこらの中は薄暗かった。ひかりの気持ちは、しばらくは落ち着

きそうにもなかった。

あやや、ほかのクラスメートのことが気になってしょうがなかった。なぜあんなものが突然現れ、村を襲ったのか、もうわけが分からなかった。

「ひかり・・・？ ひかりだよな？ 大丈夫か！？」

まことも同じほこらに逃げてきたようだった。

「まこと！ な、なんだったの？ あれ・・・」

ひかりが聞く。けれどもまことがそんなこと知らないなんてことは分かりきっていた。

まことは、ひかりをつれて外の方へ向かおうとした・・・が、よく見るとほこらの隅の方に人の影があることに気付いた。おびえていて、うずくまっていた。けれど、大きな体だった。ふたりは、その人物を一目で、認識できた。

「ゆずる！」

ふたりの叫んだ声がほこらの中に響いた。ゆずるはゆっくりと振り向いた。

それから3人はこれからどうするか話し合った。

ひかりが言った。

「私の家なら、結界が張ってあつて安全だよ。あのドラゴンのことも、お父さんに聞けば何とかなるかも。お父さんとお母さんならきつと何とかしてくれる！ クラスのみんなを助けてくれる！」
まことは、そこまで頼り過ぎるのもどうかと思ったが、そうするしかないと思つて、行くことを決めたようだった。

「よし、3人でひかりの家へ向かう。絶対に離れるなよ」

まことは、落ち着いていた。ひかりは、そんなまことを見て少しずつ落ち着きを取り戻していた。

「い、嫌だ！ オレはここに残る！ どうせ行っても何もできないんだ！」

ゆずるが叫んだ。思わぬゆずるの発言にふたりは少し驚いた。

「あなたは一人が残るっていうの！？ そんなの、私が許さない

！
ー

ひかりは、これ以上仲間を傷つけまいと必死だった。一刻も早く、元の生活に戻りたかった。

無理やり連れて行くことにした。ゆずるはなぜか、必要以上に拒んだ。けれどもひかりはゆずるを絶対に離しはしなかった。そんな二人を見守るなかで、まことはかすかだが気配を感じていた。

人間の物ではなかった。ほこらの奥のほうから、力のようなものを感じていた。それが何かはわからなかったが、今はふたりの後を追うことにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0160p/>

The Truth Of Magic

2010年11月24日16時36分発行